第4講：62「これより東」

おやさと研究所研教授
森　洋明　*Yomei Mori*

逸話篇62「これより東」は、父親が救けられたことで入信した山本藤四郎が、おたすけに奔走するなかで、教祖から「四方より詣り人つける」というお言葉をいただいた話である。ここでは、この逸話を読み解くキーワードとして、「親孝行」「陰徳」「僻地」「病たすけ」という4つのポイントから考察を試みたい。

「親孝行」

重い眼病を患った父親に対して「どうでも父の病を救けて頂きたいとの一心」から「父を背負い、三里の山坂を歩いて」おぢばに参拝した藤四郎に対し教祖は、「親孝行に免じて救けて下さる」と声をかけられている。「免じて」という表現からは、父親は救からなかった「いんねん」であったのかもしれないところを、子供の親を思う心に「免じて」、神が不思議な守護を与えられたと考えられよう。こうした話は、例えば、逸話篇16「子供が親のために」と通じており、その逸話の「救からんものを、なんでもと言うて、子供が、親のために運ぶ心、これ真実やがな。真実なら神が受け取る。」というお言葉からも、「親孝行」によって運命が切り替わったことが分かる。

しかし、子どもの親を思う心によって救けられた藤四郎の父ではあるが、生涯を通じて息子の信仰には反対したようだ。おたすけに行こうとする息子に激怒し、石を投げつけたこともあったという。しかし、藤四郎はそれでも親孝行を貫き、日中は家業である野良仕事に精を出し、それを終えてからおたすけに奔走した。まさに道を通るなかにあっても、「日々には家業という、これが第一。又一つ、内々互い〳〵孝心の道、これが第一。二つ一つが天の理と諭し置こう。」（「おかきさげ」）というお言葉で教えられる「二つ一つ」を体現した生き方であったと言えるだろう。

「陰徳」

信仰を始めてからの藤四郎は、我が身のことは後回しにして、人のことを先にするようになった。また、病人や事情に苦しむ人がいれば、遠路、山坂、暑さ、寒さをいとわず、お屋敷に帰り救済を願った。そうした日頃の姿を見ていた教祖から、「いつも変わらずお詣りなさるなあ。」というお言葉をいただき、「かえってみると、病人は、もうお救け頂いていた」といった不思議なご守護に繋がっていったのである。中止を余儀なくされた教祖1年祭のときには、早朝から便所掃除や草むしりをしていたので、家の「使用人」と判断され、追い払われずにすみ、無事最後まで参拝できたというエピソードも伝えられている。

「徳」とは、『天理教事典第三版』によれば「将来現れてくる可能性を含んだ種（たね）のようなものとして受け取られる。それは、それを受け取って親神が守護を見せられるその原因、元となるもの」と言われている。それはまた「人の善行も、すぐには現れないが、時が経てばその陰徳により幸いとして報いられる」と言われる「伏せ込み」のあり方と通底している。

「僻地」

笠（奈良県桜井市笠）は、天理から南東へ12㎞のところにあり、標高400～500ｍの山間に位置する。逸話にも「水なき里」という表現があるが、水に苦労する「僻地」だった。また、そこに行くためには険しい峠道を通らなければならなかった。牛馬の背に乗せた鞍がすぐに外れるくらい急峻だったので、「鞍取り峠」と呼ばれていた。しかし、そうした場所であっても、上之郷出張所（現在の上之郷大教会）の神殿が竣工した明治27年（1893年）には、1,500人にも及ぶ人々が帰参したと記録されている。まさに「四方より詣り人をつける。」のお言葉通りの姿だった。この道の信仰に距離の遠近は関係ない。

現在に置き換えて考えてみるなら、グローバル時代と言われて久しい現代において、「僻地」とはどういう場所になるだろうか。ネットやスマホの普及によって、地球上のさまざまな地域や人と結ぶことができるようになった情報化社会では、国境の隔たりや物理的距離の遠近はなくなりつつあるかもしれない。それでも「僻地」とは「自然条件や経済条件に恵まれず、社会的な孤立や貧困の問題を抱え、近代文明の恩恵を受けることが少なく、医療、教育環境の充実も困難」（『日本大百科事典』）なところだとするなら、いわゆる「発展の途上」の国々、なかでもアフリカなどの多くが「僻地」だと言えるのではないだろうか。

「病たすけ」

藤四郎は父親の病気がきっかけとなって入信したが、この道に引き寄せられた人の多くはこの病という神の「みちおせ」による人が多い。そこには、医学が現代のように発展しておらず、「医者の手余りとなり、加持祈祷もその効（こう）なく、万策尽きて、絶望の淵に沈んでいた」といった状況が多くあったのではないかと考えられよう。

しかし昨今、科学の発達や医学の発展によって、さまざまな病気の原因が解明されることになった。こうした時代において、「病」のとらえ方自体が変わってきているのではないだろうか。言い換えると逸話篇に出てくるような熱病や腰痛、眼病や歯痛などによって「絶望の淵」に陥る状況は少なくなってきていると言えるだろう。もちろん、医学の発達した現代においても、治療法の見つからない難病や原因不明の病気で苦しむ人たちがいるのは事実だが、世の中全体が医者や薬に頼る志向が強くなっているのも事実であろう。

実際に、1950年代から新宗教に入信する理由としては、いわゆる「貧・病・争」から心の問題が多くなってきていると指摘されている。とくに、これまでの地縁や血縁といった伝統的な人間関係が希薄になりつつ昨今、自身のアイデンティティの喪失によって心が不安定になるとも言われている。そうした社会の動きに呼応し、時代の変化に応じた道への誘い方を模索することも、この逸話が示唆するところのように感じられる。

最後に、「これより東」という逸話のタイトルからは、おぢば中心とした世界観を見ることができる。親神がお鎮まり下さるこのぢばは、人類のふるさとであり、それはまさにこの世の「中心」であることを意味する。しかし世間的には、奈良や京都、東京といった中心地があり、世界的に見れば、イギリスやフランスといった世界の歴史を作ってきた「中心」が存在する。そうした社会の歴史には、その時代の価値観や「当たり前」とされていた考え方がある。「せかいいちれつたすけたい」という親の思いの具現化を期して、この教えを世界に伝えるためには、世界のさまざまな事情を知っておくことは欠かせない。そうした探求の姿勢もまた「親孝行」に通じる姿ではないかと考える。